

Q34 排泄に関する配慮

<このような状態は自閉症の特性からきています。>

小学3年生のAちゃんは、「今行ったのに」とつい口から出てしまうほどトイレに行きます。トイレの様子を見てみると、多少の差はありますが毎回おしっこは出ています。無理に止めても、結果的にはまたすぐに行くことになります。

自閉症の子どもは、日常生活に様々な不安を抱くことがあります。「いつもと変わったことはないか」「今日の予定が分かっているか」「体調には変化がないか」「教師の関わり方に変化はないか」「仲間との関係はどうか」等に視点を当てて、本人の不安を探ってみることも大切です。また、トイレに行くことそのものがこだわりになっている場合もあるので、本人の興味関心が他のことに向かうよう手立てをとることも大切です。

<このような場合の支援 1>

小学1年生の知的障害を伴う自閉症の男児。校庭で遊んでいる時に、遊具の上からおしっこをするなど、トイレ以外のところで排尿することがあります。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

- ① トイレを使用することや、特定のトイレを嫌がっていないか、確認する。
- ② トイレ以外で排尿する場合、本人の満たされない気持ちのサインであることも考えられる。
- ③ 周囲が騒ぎ立てることが、本人の問題をさらに強めてしまうこともあるので、その点も配慮する。
- ④ トイレでの排尿ができたら大いにほめて認める。
- ⑤ トイレの時間を決めて、教師も本人に付き添ってトイレでの排尿を促す。

<このような場合の支援 2>

小学4年生の高機能自閉症の女児。決まったトイレでないと排尿ができません。特に校外学習の際は、おしっこがしたくてもなかなかトイレに入れず時間がかかってしまいます。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

- ⑥ 校外学習の際は、トイレの問題を事前に本人と話し合っておく。教師の下見による情報をできるだけ本人に伝えておく。
- ⑦ 本人の希望があれば、教師あるいは親しい友だちとトイレに行くことを約束しておく。
- ⑧ いろいろな場所のトイレを使えるよう、日頃から家庭との連携をとり経験を重ねる。

学級担任の記録(メモ)

<項目の利用回数>



月／日	対象児の問題	教師やクラスの子どもの対応	対応後の対象児の様子